

多様なエキスパートがひとつになる

虎の門病院 循環器センター

心臓の疾患を扱う虎の門病院の循環器センターは、新しいスタッフが加入し、組織体制を充実させ、生まれ変わりました。今号では、その取り組みの実際や外科と内科のチーム連携の姿を特集、お伝えしていきます。



内視鏡下MICSを行う循環器外科チーム

虎の門病院 循環器センターとは



毎日行っているハートチームカンファレンス

令和元年、新病院とともに虎の門病院循環器センターが生まれ変わりました。内科は児玉隆秀医師が部長に就任し、さらにカテーテル治療や心エコーを専門とするエキスパート医師らが加わりました。外科は田端実特任部長、松山重文部長が就任し、気鋭の若手医師とコメディカルスタッフも加わり、前年比約5倍のペースで手術症例を行っています。また、集中治療科も医師を増員し、より多くの患者さんを治療できる体制となりました。内科・外科、そして職種間の垣根がない「ハートチーム」として、心臓弁膜症、虚血性心疾患、不整脈、心不全、大動脈疾患、末梢血管疾患など幅広い循環器系疾患の診療を行っています。新しいチームの舞台となる新病院は最新設備と快適な空間を備えており、患者さんの多様なニーズに合う循環器治療ができる環境になっています。

主な対象疾患

- 心臓弁膜症 ○ 虚血性心疾患 ○ 心不全 ○ 不整脈 ○ 大動脈・末梢血管疾患
- 肺塞栓症・下肢静脈血栓症 ○ 心臓腫瘍 ○ 成人の先天性心疾患

日本人の死因の上位を占める

虚血性心疾患

虚血性心疾患とは心臓自体に血液を送る冠動脈が、狭窄または閉塞することにより胸痛やポンプ機能低下などの症状をきたす疾患であり、日本人の死因の上位を占めています。当センターはこの疾患に対して、多様な治療オプションを有しており、ハートチームで患者さん一人ずつの

疾患について検討して、薬物治療、カテーテル治療、冠動脈バイパス術あるいはこれらを組み合わせたハイブリッド治療の中から最適な治療を行っています。カテーテル治療ではロータブレータや方向性粥腫切除術(DCA)を用いた治療を積極的に行っており慢性完全閉塞病変(CTO)の治

療成績も良好です。バイパス手術ではオフポンプバイパス術(OPCAB)を基本とし、胸骨正中切開を伴わない低侵襲バイパス手術(MIDCAB)や重度な動脈硬化病変に対するonlayグラフト術も行っています。

高齢化と早期発見で急増中

心臓弁膜症

当センターの弁膜症チームの特徴は、①正確な診断 ②高度な手術・カテーテル治療 ③綿密な周術期内科的治療とフォローアップです。これらはいずれも質の高い弁膜症治療に欠かせません。2名の心エコー専門医と検査技師が最新鋭心エコー機器を駆使して弁膜症の重

症度や病態を診断して、手術が必要かどうかを見極めます。経験豊富な心臓外科医が複雑な僧帽弁逆流でも自己弁を温存する僧帽弁形成術を行っています。また、弁膜症手術の基本アプローチは胸骨を切らない内視鏡下手術(MICS)です。2019年8月現在、TAVIやMitraClipなど

のカテーテル治療は東京ベイ・浦安市川医療センターにて虎の門病院医師の執刀で行っています。手術だけでなく投薬による内科的治療やリハビリにも注力して、総合力で弁膜症を治療しています。



2名の超音波医学会認定専門医を有する心エコー室



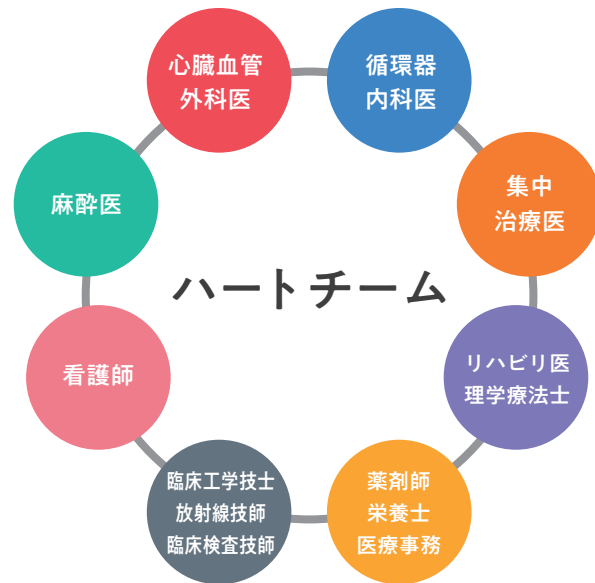
カテーテル治療を行う循環器内科チーム



専門や職種の垣根がないチーム

HEART TEAM (ハートチーム)

ハートチームは、高いスキルを持った多職種エキスパートから構成され、日々、チーム一丸となって患者さんに質の高い治療を提供していきます。



多様なエキスパートが力を結集して、個々の患者さんに最適かつ質の高い循環器病治療を提供すること。それがハートチームの使命です。ハートチームを構成するエキスパートは、循環器内科医、心臓血管外科医、集中治療医、麻酔医、看護師、臨床工学技士、理学療法士、臨床検査技師、放射線技師、薬剤師、栄養士、医療事務など多岐にわたります。虎の門ハートチームには新しい時代を担うスターたちがあらゆる職種で揃っています。「的確な診断」「様々な治療オプションからの最適な治療選択」「高水準の内科的治療、カテーテル治療、外科手術、そしてハイブリッド治療」「早期回復を支える術後管理と心臓リハビリ」これら全てを提供できるハートチームは多くありません。高いスキルを持つ個人がチーム一丸となって、患者さんの心臓・血管の病に挑みます。

PICK UP 医師と理学療法士の職種間連携とその効果とは？

様々な職種が一丸となり、循環器疾患の治療とケアに力を尽くすハートチーム。今回は、早期退院の援助に欠かせない「医師と理学療法士の連携」をご紹介します。

虎の門病院では循環器疾患でも手術後4～5日で退院できるケースも少なくありません。手術後に低下した身体機能を取り戻すために術後リハビリテーションが行われます。手術翌日から理学療法士が患者さんのベッドサイドを訪れ、安全に配慮しながら運動をサポート。また、ハートチームカンファレンスや、医師の回診に同行して、患者さんの状態に応じてリハビリ内容を調整しています。常に医師と連絡が取れるオンコール体制を整えていることも特徴です。メンバーが職種の壁を越えて気軽に相談し合える環境には、多くのメリットがあります。例えば、患者さんの痛みに気づいた理学療法士が医師へ連絡し、迅速に疼痛コントロールすることで、リハビリを予定通りに進められます。また、医師が事前に術後の見通しを伝えておくことで、そこに重点を置いたりリハビリを理学療法士が組み立てることも可能になります。チームのメンバーが手を取り合い、それぞれの専門性を最大限に生かすことが、患者さんのスムーズな社会復帰のために不可欠なのです。



循環器 センターの挑戦

風通しのよいチーム体制、心臓だけでない総合病院の力を生かした医療を
複数の循環器疾患や心臓以外の疾患を抱える患者さんもいらっしゃいます。虎の門病院循環器センターは、そのような患者さんに対してもチーム力を最大限生かした医療を提供しています。

CASE-1

総合病院ならではの心臓以外の疾患をかかえる
患者さんの心臓病治療

半年前に心筋梗塞で右冠動脈にステント治療を受けた70歳の男性が、肝臓がんの手術目的で当院に紹介となりました。紹介医からは心臓は気にせず手術を行ってよいと言われていたようですが、当院外科の担当医が胸痛症状に気づいて、循環器センターで精査を行いました。軽い労作で異常な心電図変化を認めたため、直ちに心臓カテーテル検査を行ったところ、冠動脈の最も大切な部位である左主幹部が90%程度つまっている状態でした。通常のステント治療を行うと血をサラサラにする強い薬が必要なため肝臓がん手術を延期する必要があり、冠動脈治療なしに手術を強行すれば心筋梗塞で命を落とすリスクがありました。そこで我々は、強い薬の必要がないDCAというカテーテルで血管のつまりを削り取る治療を選択しました。この治療は高度の技術を要するため、行える施設は限られています。冠動脈治療は成功し、この患者さんは予定を遅らせることなく、肝臓がんの手術を無事終えることができました。心臓専門病院では成しえない、総合病院ならではのスムーズな連携治療ができました。



CASE-2

内科と外科の垣根がない
虎の門病院循環器センターならではのハイブリッド治療

毎月海外出張をこなす57歳男性が重度の僧帽弁閉鎖不全症(逆流症)と診断されました。この男性は半年前から疲れやすさと息切れを自覚しており、当ハートチームで早期の手術が必要と判断しました。さらに術前検査で冠動脈の狭窄が見つかりました。このような疾患に対して胸骨正中切開による僧帽弁形成術+冠動脈バイパス術が一般的な選択ですが、当ハートチームは患者さんの早期社会復帰を考慮して、胸骨を切らない内視鏡下右小開胸アプローチ(内視鏡下MICS)僧帽弁形成術+冠動脈カテーテル治療(PCI)のハイブリッド治療を行いました。術後は早期退院リハビリプログラムを行い、術後5日で自宅退院して、退院後5日で職場復帰されました。内科と外科の垣根がないハートチームだからこそ患者さんのニーズに最も合った治療を行うことができました。



✚ 循環器のことは私たちにご相談ください



循環器センター外科
特任部長
田端 実

「治療選択や手術方法に関するセカンド
オピニオンもお気軽にどうぞ」



循環器センター外科
部長
松山 重文

「ハートチームであなたに合うオーダー
メイド治療を提案します」



循環器センター内科
部長
児玉 隆秀

「心臓や血管はもちろん、それだけでない
のが虎の門病院です」



フロア専任コンシェルジュがご紹介！
プライバシーに配慮された安心感のある環境
でお迎えする特別フロアをご紹介

PICK UP

あらゆる診療科の方や幅広い年齢層の方に
安心して入院していただける病棟

最上階(19階)は、プライバシーが保たれる特別個室が並びます。このフロアの看護師は、あらゆる診療科・年齢の患者さんを見る上で必要な幅広い知識や技術を習得していきます。患者さんのニーズを理解するため、カンファレンスなどを積極的に行い、安心して入院生活を送れるように努めています。社会の動向や気になる出来事を自身の考えを踏まえてプレゼンテーションする訓練で、判断力や洞察力を培うなど、看護の技術的な側面だけでなく、温かみのある看護の質の向上に、病棟全体で取り組んでいます。また、“全ての始まりは笑顔と挨拶から”ということを基本とし、不自由なことも多い入院中だからこそ、少しでも心地よく過ごしていただければ幸いです。



看護師たちは「頼りになる」「任せてよかった」という言葉をいただけるように日々研鑽しています。



Q. フロア全体の特徴はどのようなことですか？

高級感ある4種類の特別個室に加え、食事や打ち合わせにも使える専用ラウンジが2つあります。一般の患者さんは立ち入れず、専用の動線や各個室用のカードキーが備えられているため、プライバシーの面でも安心です。



各個室にセキュリティを完備



特別個室C



私たちコンシェルジュが、情報収集やタクシーの手配、宅配便の受け取りといった生活面をサポートします。

Q. どのような食事が提供されますか？

常食の患者さんであれば、朝・昼・夕の3食それぞれでセレクトメニューをご用意しています。夕食では「うな重」「ビーフシチュー」「海老チリ」から選択できるなど、身も心も満足できる食事をお楽しみください。



和食(うな重)



洋食(ビーフシチュー)



朝・昼食のセレクトメニューは日替わり。その日の気分でお好きなものを選べます。

Q. 特別個室とはどんな病室ですか？

一般の病室とは一味も二味も違う、上質なインテリアとゆったりした空間がうれしい環境です。何かと制限が多くなりがちな入院中も、ご自宅に近い落ち着いた環境でご療養いただけます。



特別個室A



ソファスペース(写真は特別個室A)



特別個室A/Bにはバスルームが、特別個室C/Dにはシャワールームが完備されています。

Q. 部屋の設備やアメニティーはどのようなものですか？

各個室に大型テレビやラグジュアリーなソファなどを備えています。各種動画サービス(Hulu、Netflix、YouTube)でリラックスタイムを過ごすのもいいですね。高級ホテルのようなパジャマやアメニティーも自由にご使用いただけます。



ベッドになるソファ



ベッドになるソファを備えた部屋もあり、ご家族やお見舞いの方もゆったりとくつろげます。

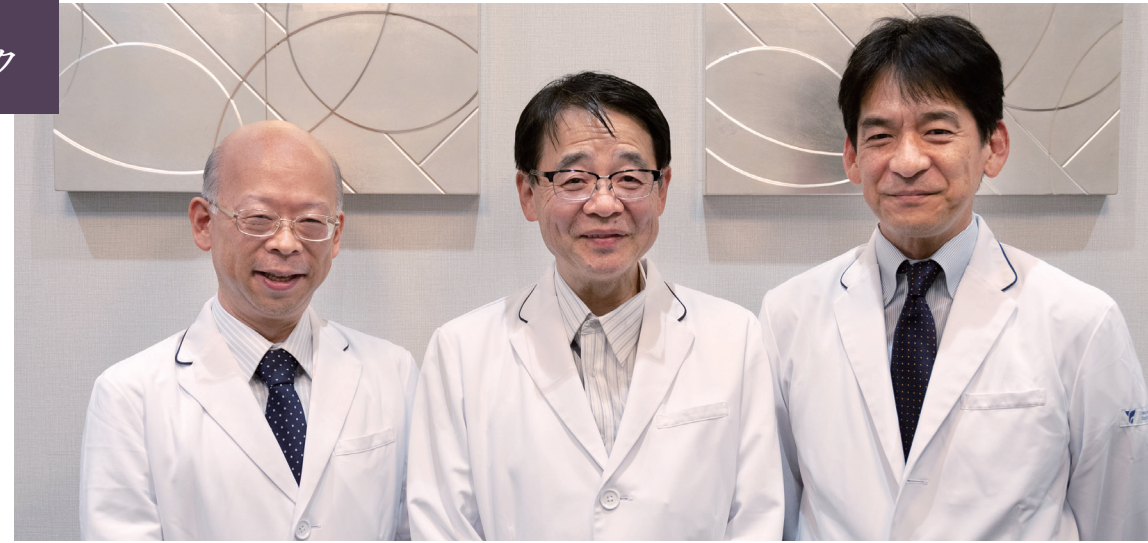
TALK SESSION

がん×人間ドック

荒木 昭博
ARAKI AKIHIRO

荒瀬 康司
ARASE YASUJI

布袋屋 修
HOTEYA SHU



左から荒木 昭博(健康管理センター部長)・荒瀬 康司(健康管理センター・画像診断センター統括センター長)・布袋屋 修(消化器内科・内視鏡部部長)

一貫性のあるスムーズな連携こそ 「予防」と「治療」をつなぐカギ

本院の医師もドックに関与し
スムーズな連携で高品質を担保

荒瀬:元気で介護の必要がない状態、つまり健康寿命をできるだけ長くするためには、40~50歳代くらいから人間ドックで自らの健康状態を把握し、“弱点”をカバーしていくことが大切です。例えば、運動や食事などの面で対策しなければ、人間の筋肉は1年につき1.0~1.2%ずつ萎縮します。筋肉が弱って転倒し、骨折して寝たきり……となる前に、体をケアする意識を持つことが重要です。

布袋屋:早期に問題を発見すれば身体的にも精神的にも少ない負担で治療できるし、完治する可能性も高まりますね。だからこそ、質の高い人間ドックを受けることにこだわってほしいと思います。せっかく時間やお金をかけてドックを受けても、病気を見逃されてしまっでは意味がありませんから。

荒木:診断のクオリティを維持・向上させるため、カギとなるのが医師をはじめとするスタッフ同士の連携です。虎の門病院と当センターは一体的に運営されており、施設や診療科などの垣根を越えてスタッフが連携しています。これは言うだけなら簡単ですが、実現させるのはなかなか難しいことです。

荒瀬:人間ドック健診専門医に加えて、本院

に所属する医師が検査や診断に携わっているのも特徴的です。患者さんのQOL(生活の質)を向上させるためには、検査技術はもちろん、データの正確な読み取りや診断、分かりやすい日常生活の指導といった高度な専門性が求められます。十分な専門性を備えた医師が責任を持って取り組んでいることも、私たちの強みだと思っています。

布袋屋:私自身、本院の消化器内科に所属しながら、人間ドックの内視鏡検査などを担当している医師の一人です。ドックを受けた患者さんのフォローアップを本院で行ったり、本院の患者さんへ定期的なドックを勧めたりすることも多いですね。一般的な大学病院と比べても非常に連携がスムーズであることを、日々の診療の中で実感しています。

荒木:患者さんのカルテを共有するなど情報面でも連携が進んでおり、スピード感のある医療サービスにつながっています。「午前中に人間ドックを受けて病気が見つかった患者さんが、午後には入院して治療を受けている」ということもあるほどです。

医師がお勧めする
より良い人間ドックの受け方

荒木:毎年のように異なる施設で人間ドックを受ける人もいますが、体の異常

を見つける上では、その患者さんを初めて診るよりも、過去のデータを踏まえて変化を読み取るほうが正確なのです。できるだけ同じ施設に通い続けたほうが、病気は見つかりやすいといえるでしょう。

荒瀬:「○○の専門外来を受診しているから、他の部分の病気も見つけてくれるだろう」という誤解もありがちです。病院の専門外来では特定の部位にフォーカスしているため、それ以外の部分の病気は見つけづらいこともあるのです。すでに専門外来にかかっている、人間ドックは必要な存在といえます。もちろん、医師の質も重要です。例えば布袋屋先生は、海外に招聘されて内視鏡のライブデモンストレーションを披露するほどの腕前ですよ。

布袋屋:ありがとうございます。本院の内視鏡部は、患者さんの苦痛をできるだけ軽減する新しい技術を取り入れつつ、臨床検査技師が介助者として関わることで、より安全で迅速な検査を実現しているのが特徴です。

荒瀬:内視鏡への苦手意識がある人も安心ですね。健康寿命を延ばすためにも、定期的な人間ドックで全身を隈なくチェックし、必要に応じた治療をすぐに受けることを大切にしていきたいと思います。